血国の星のマクロファージ

麻栗留音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
血国の星のマクロファージ

【Ｎコード】
Ｎ３６１５Ｚ

【作者名】
麻栗留音

【あらすじ】
血液型によって住み分けが強行された、遠くない未来の極東の島。悪政によって島の経済は混乱し、傀儡の中で維持されていた平穏は忘却の彼方に消え去った。分散隔離され、偏った管理システムからのカオスに包まれた人災の島で、バランスの取れたあるべき平穏を取り戻すために結束するしがないアラサー男４人。そんな見栄えしない男らの元に突如現れた『Ｘ型』の血を持つ謎の少女。５つの異なる血がひとつになった時、宇宙の病巣を食らう「無限細胞」が目を覚ます。島の平穏を取り戻すための抗争は、制御不能の渦中で星

を運命を掛けた戦乱へと次第に姿を変えてゆく。

とあるBさんの場合（前書き）

みんな大好き「血液型」と、ヘボ著者がそれしか書けない「ＳＦ」をどうにかこうにかドッキングさせて、足りない頭をフルに使って、知恵熱出ない程度に頑張って、色んな合間に楽しみながら書いてゆこうと思ってます。

稚拙・未熟・下衆な文体・誤字脱字、どうかご了承願います。注意して書いてますが如何せんヘボなので見逃すと思います。腹の内で「へっ！」と軽蔑して頂き、どうか寛容に読み進めて頂けましたら幸いです。

とあるBさんの場合

２年前。西暦で２０１３年の初日の出を迎えても、世界は全然、全く持って滅亡する気配が無かった。
滅びる気配すら微塵も見せず、朝にはスズメがチュンチュン鳴いて、夕暮れカラスがカァカァ鳴いた。

変わらずその連続だった。

どの時代のどこの誰の予言も、僕らを適当に脅かせて怯えさせて、ごく少数派に淡く期待だけ持たせて、そして定番の「あの」チャラけたＢＧＭが流れて愉快痛快なネタばらし。
ノストラもマヤもダヴィンチも、熟練の上手いディレクションで番組を盛り上げたもんだ。某番組のヒッチハイク企画も奴らがディレクションしたんだな。
古代人が仕掛けた大掛かりな、完璧嫌がらせの壮大なドッキリ企画の前では、仕掛けられちゃった人間は呆気に取られるだけ取られて、苦笑いするしか無い。「あー良かった…」とか言い放ちながら、胸に震える両手を添えて。
『後世がドッキリ！勝手に滅亡予言２０１２！』みたいな古代テレビの企画だったんだ。ネタばらしのプレートを見せられた僕らの不様で滑稽な姿を眺めて、奴らはさぞ笑ってるだろう。僕らがバラエティー番組で安い笑いを消費するあの感じと一緒だ。
過去で奴らは笑っている。腹を抱えて笑っている。

潔く滅亡する事無く、それまでと変わらない瀕死の状態の中、中枢神経に響く堪えられない激痛を携えたまま、僕らは苦痛に激しく歪んだ顔で、スズメが鳴く朝をカラスが鳴く夕暮れを越えて、それでも真摯に、明日への歩を進めたんだ。

「それでも〇〇してゆく」って文句がそこら中に乱立していたのは、僕らが正にそうやって生きていたからだ。
そこら中、至る所から維持出来なくなった資本体制が崩壊してゆく音が鳴っていた。温暖化で崩れてゆく南極の氷山のそれに似ていたけれど、みんな見て見ぬ振りをしていた。
だって怖かったから。
シンプルに怖かったから。

どんな馬鹿な輩だってガンガン氷山が崩れていってるのを敏感に感じてたけど、すげー怖かったから見ない振りをしていた。
子供から何からみんな、本当にすげー怖い光景なんか見たくない。
それでいて「衝撃映像ＳＰ！」は家族揃って楽しんだ。
対岸の火事からの安全な怖さは一家団欒の中で楽しめて、我が身に確実に跳ね返って来るリアルな怖さにはみんなで見て見ぬ振りを決め込む。だって「本当にリアルな恐怖」はすげー怖くて怖くて、テンパってキョドって何も手に付かなくなって、不安で不安で仕方がなくなるものだから。誰もすげー怖くて不安になる光景なんか好き好んで見ないし、見たくない。

いつの間にか「国民総見て見ぬ振り運動」を無意識に、江戸時代の「ええじゃないか運動」みたいに自暴自棄になって踊り更けていた、「対岸の火事」として見るなら家族で楽しめる、極東のちっちゃくてキュートで、「あげぽよ・てへぺろ」な島。
そんな、僕の生まれたこのちっちゃくてキュートで窮屈で息苦しい島は、前世紀の世紀末を境に急速に確実に疲弊していた。
カラフルでキュートなキャラクター風船が、色がごちゃ混ぜになって皺だらけに異形に、グロテスクに萎んでゆく様と変わらなかった。もはや恐怖すら覚える程グロテスクに劣化した元・読者モデルだったクソぽよの島の中では、もう、僕らの環境が明確に変わる様な変化…それこそ僕ら血気盛んな若者の胸が高まる様な、文字通り「鮮

烈な変化」なんて起こり得ないと諦めていた。僕を含めてだいぶ大勢が諦めていた。
老若男女、だいぶ諦めていた。だいぶ「さげぽよ・てへぺろ・なきゲロ」していた。３つ目のやつは僕の捏造だ。
甘ったるくおぞましい脱力感の中で、互いが原因不明の脱力感を認め合い、馴れ合う事で安心を感じるしか無かった。
端から見たら物凄く可哀想な状態だった。

そんな中で僕らの、諦めの中でも密かに頑なに待ち望んでいた「鮮烈な変化」とは裏腹に、「混沌への激変」が予告無く突然にやってきた。

有名アーティストの厳重に事前情報の遮断されたゲリラライブだって、始まる前に空気でなんとなく「何か始まる」のが分かるのに、その「混沌への激変」は国家を上げて兆候を隠蔽に隠蔽のミルフィーユ仕立てにされ、公の場で仰々しく厚かましく披露されるまで進められている気配すら漂わせなかった。
伏線など張られず、何の前触れも無く、僕らは迷走して思考の停止した名ばかりの舵取りの、聳え立つ氷山を前にした土壇場の操舵…
否、「悪あがき」に完全に翻弄されたんだ。
土壇場の悪あがきは十中八九が、結果、間違った判断になるってみんな分かってるはずだ。
分かってるはずなんだ、経験してるだろう。僕も、君も、貴方も、お前も…。

でも…、ここでまたしても出ました、僕ら伝統のお家芸「見て見ぬ振り」。
毎度毎度、お馴染みの神ってる阿波踊りでござぁい。

もはや僕らは孤高の天才だったんだ。馬鹿を通り越した、救えない

意味で。

自分らがそういう状況に在る事は、自分らではなかなか気付けないもんなんだ。だからそういう時には、本当の友達なら「お前、間違ってるぞ！」って言葉を掛けてやるのが当然なんだが…。

なんでだろぉう、なんでだろぉう。

どこの国も何ひとつ「オマエ！マチガッテルヨ！」って言わなかったのはなんでだろぉう。

忘れ去られた芸を敢えて引き合いに出す程に痛い所業、それに匹敵するイタタタッな状態にあっても、諸国の友達らはびっくりするぐらい傍観してた。

「オー、ジャパン、オッキナトモダチ！」とか散々ほざいてやがったあの国なんか、自分でも気付かない内に間違った方向へ一直線に脱線してゆく「トモダチ」に、軌道修正を悟らせる言葉を掛けるどころか逆に囃し立て、神経を逆撫でする程胡散臭いスマイルで賛同し、すげー同調した。

「トモダチ」の皮を被った感染力の高い性病を保有する汚いモノをぶら下げた輩はあっちにもこっちにも、本当にゴキブリの様にわんさと居る。ゴキブリの様に周到に根気強く隠れているだけで、人間の中にも、世界の中にも、不慮に転がって来た美味しい餌にここぞとばかりに一斉に群がって来る。

自分にとって本当に友達かどうか良く見極めないと、信じ切っている内に奈落の底に叩き落とされる。だから神経を擦り減らして注意し、輩の本質を見定めなければいけないのに、自分自身の行く末が見えなくなって、その上やけくそに踊っちゃってる奴に、それが見定められるはずなんか絶対に、無い。

そんな盲目的な奴らが狭っ苦しい空間で大量に踊っちゃったんだか

ら、哀れな程に致命的で、満場一致の決定的な最期だった。

それはそれは民意無視の滅茶苦茶に強引な、名ばかりの舵取り曰く「政策」という名の「混沌への激変」であり「破滅への祭り囃子」だったのに、僕らはすげー滑稽にみんなで一緒に踊っちゃった。馬鹿みたいに整列して、馬鹿みたいに律儀に、姿勢を正して、音頭に合わせて。…踊りより「お遊戯」と呼ぶほうが的確な表現かもしれない。

宝石や百科辞典の押し売りよりずっと質が悪い押し売りだったのに、言葉巧みな名ばかりセールスマンという詐欺師達の口車…見掛けだけは古いアメ車のイカしたオープンカーに見える、シリンダーもフレームも肝が全て錆だらけの「ビッグマウス・ローライダー」に得意気に乗っかって、それはそれは爆笑のカーニバルを1億2千万人で盛大に踊り明かしちゃった。

全世界に向けて「終末特番！衝撃映像大放出！抱腹絶倒5時間半SP！！」を島全体から強烈な地上波デジタルで発信した。世界の「学名・トモダチゴキブリ」達には腹が捩れて横隔膜が引き付けを起こす程楽しめる、収拾の着かない「対岸の大火事」だったろう。陰で腹を抱えて笑っていたはずだ。古代テレビのドッキリなんか比にならない程に陰湿で、悪質な笑いだ。

まさか僕の生まれた時代に、まさか僕の生まれた国で、それまで幾度と無く性懲りも無く繰り返された過去の様な「激変」からのぉ～！「激動」は起こらないと、不気味に続いた虚栄の平和の中で根拠無く安心し切っていた事を痛感した。

「人生には3つの坂があります。上り坂、下り坂、そして…。はっはっは！月並みですねぇ。」

結婚式の披露宴の、親族代表挨拶の決まり文句じゃないか。３つ目の坂が一番危ないって、みんなみんな耳が腐る程聞いて来たじゃないか。なんでここぞの時に忘れてんのさ、僕も、みんなも…。失ってみないと、平和の価値など漠然として分からなかった。なんでもそうだ。本当になんだってそうなんだ。分かってるのに。分かってるのに…。

…気付くのがみんな、いつも、いつも、毎回、毎回、遅過ぎた。毎度の事だった。救えない馬鹿げた毎度だった。

焦がしてしまったシチューも、頭の悪い悪政も、蓋を開ければ中身は同じだ。

メールの着信なんかに気を取られて、ほんの僅かに油断して少し掻き混ぜるのを怠った瞬間に、ホワイトソースはあっつう間に焦げる。ホワイトソースの管理の繊細さは、義務教育の調理実習課程で誰しもが習ったはずだ。

慌てて気付いた時にはもう取り返しはつかない。焦げの生まれたシチューは他の料理に作り変えるのが難しい。失敗した肉じゃがをどうにかカレーにするのとは訳が違う。

ホワイトソースも政治も厳重な管理が要るんだ。一旦焦げ付けさせたらもう、焦げたシチューとして、苦味を我慢して食べるしかない。すっかり焦げ付いた僕の島の、名ばかり料理長達が苦し紛れに出してきやがった『総生産合理促進政策』という、ほとんどが焦げの食えたもんじゃない発癌ブラウンソースも同じだった。空きっ腹の僕らの前に突如として差し出されたこの『総生産合理促進政策』というド派手な失敗作。

このエグい人災の残飯の他に食べられる物なんか一切無い中で、メ

ニュー表も調味料も爪楊枝もテッシュも何も乗っていない殺風景なテーブルにそれだけ無造作に差し出されたから、みんな苦笑いしながらも我慢して食べるしかなかった。胸焼けする程の苦味を堪えて、後で気持ち悪くなるのが分かっていても、この残飯しか他に食い物が無かった。

それはそれは急拵えで無惨で、はたはた大迷惑な料理擬いの残飯だった。苦し紛れとはいえ、こんな料理ともいえない残飯をご丁寧にも「お客様」に出せてしまう店なんかろくなもんじゃない。いや、そんな店は僕らを「お客様」とは微塵も捉えていない。

そんな店も国家も潰れるってみんな分かっていたけど、僕らが暮らす巨大なシャッター街ならぬシャッター・アイランドにはそんな残飯を出してくる潰れ掛けた店しか見当たらなかった。

閉塞感で閑散としていた。僕らの街。

僕らの島。

僕らの胃袋。

どいつもこいつも空きっ腹に胃酸が溢れて胃炎になりそうだった。

そこかしこから不平不満の胃酸が込み上げていた。

そんな僕らの空っぽの胃袋に流れ混んできた強烈な焦げの塊は、「第二の脳」なんて医者に呼ばれちゃってる外部ストレスに非常に敏感で繊細な粘膜を持った臓器を、口にした本人達が思った以上にズタボロに破壊して、僕らの精神をげっそり憔悴し切らせる程の激しい吐き気を催させた。

僕らには嘔吐したくても吐ける場所がどこにも無かった。２０００年の昔からずっと最近まで、世界でも飛び抜けて品格持ってる僕らは律儀にも我慢した。路地裏の酔っ払いみたく体裁を気にせずに潔くリバースしたほうが良かったって気付いた時も、やっぱり毎度の事、「遅過ぎた。」

内部に蓄積された大量の焦げは僕らの巨大な胃袋に癌を生じさせた。僕らの暮らすこの島は胃袋に似ている。そしてこの癌は非常に悪性で、転移の速度も尋常では無かった。今、僕らが暮らすこの巨大な胃袋の様な島では、調理師免許を持っていない名ばかり料理長が差し出して来たド派手な残飯であり、人災の大カーニバル『総生産合理促進政策』に含まれた大量の焦げから発した「血液型ごとの国民の住み分け」という、救い様の無い悪性の癌が、凄まじい速度で粘膜の細胞の隅々にまで転移している。

もはや全摘するしか助かる余地は無いのに、その世術が出来る神の手を持つ医者なんかこの島にはもう誰1人として居なかったから、僕らは病巣が広がるのを感覚で感じていながらも何をどうすれば良いのか分からずに、自らの変調を緩やかに騙しながら生きる事しか術が無かった。

でもこれは、もう僕らの暮らす胃袋の様な島だけの病巣じゃない。「この世界」という臓器全てが末期症状を迎えているのに、僕らは何も出来ずにただ怯える事しか出来なかった。すげー怖い事に見て見ぬ振りをし、甘ったるくおぞましい脱力感の中で、進行する転移の流れと破滅への祭り囃子に従って、稚拙なお遊戯を律儀に頑張る3歳児みたいだった。良い大人が、見ていられないお遊戯を頑張っていた。「経済」っつう、正体の良く分からない幻影のオシャブリを咥えながら。

…なんだか文句言うのに熱中しちゃって、語ってる僕の事について説明し忘れちゃった。すげーうっかりでした。ごめんなさい。

僕の前の名前は『タカハシヤスノリ』。昭和61年8月生まれの獅子座、平成27年12月現在で満29歳になってます。男性です。気付けばもうアラサーだったりするから、光陰なんとやらでたまに感慨に更けっちゃいます。

血液型はＢ・Ｏ型のＲｈ＋、兄弟は居ません。
２年付き合ってる２歳下の彼女が居ますが、クソ政策の理不尽な隔離で遠距離になりました。彼女は『Ａ型特化経済州』、ちょっと前まで「本州」って呼ばれてた島のクソ田舎に隔離されてます。
名ばかりのクソ達の「Ａ型の人間は島全体の４０％を占める。よって面積の多い本州を特化経済州に定める。」って安直なんだか頭悪いんだかの理屈はまぁ、１万歩譲って飲み込んでやるとしてもだ。
結婚するって決めてるぐらい愛して愛して愛しちゃってる彼女とのポッカポカの恋愛をクソ遠距離にしやがった事が僕は単純にムカッ腹が立つんだ。…なんかマジでむかついてきちゃったから彼女の話しは止めます。すみません。
そうそう、僕は生まれながらの１人っ子で、生まれながらの川崎病患者です。川崎病は昭和の一時期流行っちゃった原因不明の心臓病です。すげーおっかない病気を持ってます。
川崎病は大人になったら治るってお世話になった医者が言ってたらしいけれど、現にひとっつも治らなかったっていうね。
その現状に何げにすげーがっかりしたから、だから基本的に僕は幼い頃から人を信用しません。
打ち解けた様で心から絶対信用してないし、もの凄く陰影のある二面性を持ってるのを自分で理解している。勿論、人前では隠してるよ。全て曝け出したら自分の最期だと思うよ。真の僕の姿を知ったら絶対にみんなドン引きするから、恐ろしくてとてもじゃないけど曝け出せない。
幸い、隠す事は得意だったりする。有形無形問わず色々と。
喫煙します。タバコの銘柄はラッキー・ストライク。これは高校の時から変わらない。
川崎病患者にタバコは致命的ダメージなんだが…、煙を吸わなくなったらそれは自分が死ぬ時だって人に言えちゃうぐらい、タバコが大好き。特に「食間」の一服を世界一愛してる。美味いんだなぁ、これが！

そして僕の現在の名前は『Ｂさん・Ｔ２９－８００４』。

ちょっと前まで「九州」って呼ばれていた、夏場のクソ熱いったらないこの『Ｂ型特化経済州』の、クソ田舎のそのまたクソ田舎の、その主要駅前に隣接する家賃４万８０００円１ＬＤＫのアパートに暮らす、別に何の取り柄も特に無い、国指定のやりたくもない『型式別優先産業』を例に漏れず文句言いながらちゃんと勤しむ、Ｂ・Ｏ型としてはしっかりしてる方だと思いたいけど、実際そうでもないなって思ってる…まぁ、格段面白い所も無い、そんな人間です。

…説明してたらすげー疲れちった。悪いんだけど、要所に出てきた聞き慣れない二重カッコ内の単語については『Ａ型特化経済州』の「アイツ」んとこに暗号で打信しとくから、「アイツ」から説明受けて…。

大丈夫、僕が自分の性癖とか全部打ち明けちゃってる程に仲良しの「アイツ」だから、きっとちゃんと丁寧に説明してくれるからさ…。ほんとゴメン。僕ぁ４時間後にはもう仕事だから寝るよ。おやすみ。つか僕は頑張って説明したよ…。自分頑張った頑張った…、頑張っ……。

少年・A

冬の布団には魔力があると思う。そう、人を極楽へ誘う強力な魔力が。

俺の以前の名は『サクラバジュン』。

「サクラ・バジュン」じゃない。

「サクラバ・ジュン」だ。わかってんだろう？

今の名は大嫌いだ。名っつうか、型式番号だからだ。ふざけんなって心から叫ぶよ。マジ、崖の上から空に叫ぶよ。

俺、バジュンは冬の布団に至高を見出だすちょいと小粋な２９歳の独身貴族。いや、正確には「独身貧民」、だな。

元は本州だった『Ａ型特化経済州』の北の辺境、それも「国指定特別豪雪地帯」にはかなり致命的な超バラック小屋な四畳半の社宅に住み込んで、『型式別優先産業・Ａ』の「製造業」に従事している。

女はもう４年居ない。最後の女は医者の娘だった。価値観やら何やら、俺とは全てが合わなかった。形だけの馴れ合いの関係だった。

ちなみにその女は「Ｏ型」だ。有りふれた血液型相性占いとかで調べると、そんなに相性は悪くないはずなんだが、「恋愛は理屈ではない」、とかなんとか吐き捨てちゃうね。アハハ。

俺が『総生産合理推進政策』でこの辺境に赴任して来てから２年が経つ。この北の辺境にはおばやんしかいない。６０歳で「若手」という、恐るべき過疎の村だ。はっきり言って「枯れた村」だ。声を大にしてはっきり言って良いんだ、こんななんもねぇ村。チッ。

…話しを冬の布団に戻そう。いや、誰がなんと言おうと問答無用に戻します。医者の娘とのヨリは永遠に戻らないけれど、話題は時空を越えていつでも戻せるのさ。言葉は自由自在に大風となり、千の風になりて空を吹くのさ。正岡子規、ちゃんと読んでるよね？

…冬の布団には魔力がある。いや、引力といった方が的確だな。絶対こっから出たくないって人を頑なにさせる、大いなる宇宙意思の力が存在する。

冬の布団には確固たる母性があり、「国指定特別豪雪地帯」なんつう魔境へ問答無用に飛ばされて来た、１人ぼっちで天涯孤独な俺の唯一還れる母星なのだ。

俺は今、快楽と安らぎの極楽浄土に包まれて、「今日も1日お疲れ様！」と脳内バーチャルアイドル…まぁ、「アケミちゃん」とでも適当に呼ぼうか…彼女にそう飛びっきりの笑顔で言わせて、深夜の通販で買った「マガモ羽毛１００％布団セット」の中でモゾモゾしている。別にいかがわしい行為をしてモゾモゾしているわけじゃない。

キンキンに冷えた１２月の部屋の外気から遮断され、デッドエアと俺の体温、そして情熱を帯びた放屁により春の木漏れ日の如く温い布団の中で、寝入る間際の至福の副交感神経切り替えモゾモゾを堪能しているんだ。

今日という資源を費やした肉体労働からの心地好い疲労感の元に、９８０円にしては肌触りの悪くないスウェットセットと、この高かったけどしっかり温かい羽毛布団セットが織り成す温暖の境地に魂の底から浸っているのだ。「セット」って素晴らしい。最初から全て揃っているのは後々面倒じゃなくて気持ち良い。「セット」は間違いなく「アリ」だ。

果てしない安らぎを秘めた母胎のそれに似た絶対的浄土、人それを「冬場の羽毛布団」と呼ぶ。この安息の地に一度入定したら最後、俺の空間を破れるのは明日の朝の目覚まし時計のアラームのみだ。

仕事帰りにふらり立ち寄ったゲームセンターのクレーンゲームで、なんと2回目にゲット出来た「水戸黄門目覚まし時計」の、ミツクニの「スケさん！カクさん！時間ですぞ！」ってふざけたアラーム音だけが、俺の浄土からの旅立ちを促すファンファーレであって、それ以外の如何なる妨害行為にも俺の鋼鉄の意思は決して屈しない。尿意にも便意にもだ。我慢しながら寝続けるよ、例え膀胱炎になろうと彫閉塞になろうと、明日の朝まで。この社宅、便所が外ってどういう事なんでしょうか。

それぐらい俺にとってこの、仕事から帰って来てやんなきゃいけない家事雑事日常習慣を全て片付けて、やっと入定を許される極楽浄土でのモゾモゾタイムは絶対に誰にも、何にも邪魔されたくない大切な時間なのだ。

だから毎度の様に俺のこの至福を見計らった様に彼から打信されて来る暗号には正直、たまにマジでイラっと来る。彼は僕の唯一の親友だからやっぱし嬉しい反面、やっぱし少しイラっと来る。
毎度だよ、毎度。ご丁寧にこの時間に非常に高確立で。枕元に置いた無駄にデカいアナログ信号受信機が「ダンダンッ！ダンダダダダンッダンダッダダダダンッ！」ってクソうるせー音で動き出すんだよ。逆撫ですんだよこの受信機の音は、俺の神経をなんか、ムッショーに。

胎児のポーズで安らぎに包まれてる俺の頭上で、これも深夜の通販で買った「極上低反発安眠枕・グッスリキング３！定価５９８０円今なら同じものをもうひとつセットで！」と同じくらい大きい受信

機が起動するって事は、俺たち４人『ＦＵＬＬ－ＢＬＯＯＤ』の暗号って事だから、どんだけ首筋から体温と放屁で苦労して育てたデッドエアが流出しようと、クソ面倒だが確認しなくちゃならない。物凄く損した気分で非常にストレスが溜まる。

この受信機…底がゴムとか無くて畳の上でスルスル滑り、枕と平行にセッティングしても不意の振動ですぐ平行がズレるのも非常にストレスが溜まるんだよね。せっかく揃えたものがズレるのはイライラするんだっ。

「打信は嬉しいが時間を察してくれ」って、何回か彼に文句を言ってはなんとなくお互い気まずい雰囲気になったけれど、彼はびっくりするぐらい忘れる。

すぐにじゃないけど、３日経つと大抵忘れてて、毎回僕は「あの野郎気をつけるっつってたじゃねーがぁーっ！！」ってボッソリ小声でぶちまけながら、虚空に洩れ出して儚く消えてゆく、丹精込めて育て上げた愛しきデッドエアとの別れに涙しながら、枕と比べて上に２５度くらいズレてる不親切な構造の受信機に向かって鉛の様に重たくなった体を起こすんだ。苦業にも程がある。どうにかしてくれよ、ったく面倒ったらないよ。彼にもこの受信機にも「配慮」が備わって無いっ。揃って無神経だ、全く持って無神経意外の何物でも無いっ。揃ってストレスの塊だが、不思議と嫌いじゃ無いっ。くそっ！俺はなんて損な役回りなんだっ。

例に洩れず今夜もまた、鼓膜と神経に響き渡る騒音から発生した自器の振動で枕との美しい平行から醜くズレやがる、もはや骨董品に近いリボン式アナログ信号受信機が爆音を奏で始めた。眉間にあからさまに皺を寄せて、今回は「チッ！」ってあからさまな舌打ちをして体を起こしてやったぜ。彼に見えない所で細やかな抵抗だ、憂さ晴らしだ。どれ、しょうがねぇな。今夜は何を打って来たよ？実

は案外楽しみだったりすんだぜ、面倒くせぇけどなっ。

『シンヤニスンマソン　イカコウモクニツイテ　ショリユウニヨリ
　アラタメテノセツメイヲタノム』
「深夜にすんまそん、以下項目について、諸理由により、改めての説明を頼む」…、だと…？

すっかり俺の元から、まるであの日の初恋の様に去ってしまったデッドエアに代わり、壁のびっくりするぐらい薄い事が入居して初めて迎えた冬に判明したこの俺の四畳半の社宅、基、牙城。その牙城の、八甲田山で雪中行軍した部隊を全滅させた冷気とあんまし変わらないんじゃないかってくらいキンキンに冷えた空間で、俺は彼から打信されて来た暗号にがっくりとテンションが落ちた。不親切な受信機が枕からもはや度数では説明出来ない程意味わかんない方角にズレながら、馬鹿みたいに次の暗号を受信して爆音たててる。滑稽だな、お前はもう。

『ソウセイサンゴウリスイシンセイサク　ケイシキベツトッカケイザイシュウ　ケイシキベツユウセンサンギョウ　イジョウ　ゴメンネ　オヤスミ』「総生産合理推進政策　型式別特化経済州　型式別優先産業　以上　ごめんね　おやすみ」…、だと…？

…なるほどな。読めたぞ君の真意。敬意を込めて言わせてもらおう。君、めんどくさくなったね？こんなヘボ文を今日という貴重な資源を浪費して読んで下さっている、寛容で人格者、仏様の様な読者の皆様方への、大事な大事なアタックチャンスじゃなくて、説明。
俺に投げたね？
投げたね？投げましたか？
へぇー。

ふぅーん…。
まぁ、いいや。
へぇー…。

一般的に血液型で判別すると、A型とB型の相性は決して良いもんじゃない。性別や星座や生まれ年、家族構成によって違うから勿論一概に言えないが、やっぱりなんかA型とB型は合わない。それはお互いが分かってると思う。
だから大切なのは「絶妙な距離感」だと思うんだ。そのバランスが非常に大切であって、必要不可欠であり、それが無くてA型とB型の間に重要な「互いへの理解」が生まれはしないよ。絶対しないね。全く持って。賭けても良いよ。ま、君と違って俺は絶対ギャンブルしないけどね。

A・O型Rh＋、事のバランスを非常に重んじる割にたまにびっくりするぐらい一方に極端に傾く天秤座の俺と、B・O型Rh＋、勇猛果敢に後先考えないで見てるこっちがハラハラする行動を自然にとれちゃう獅子座の君とじゃ、はっきり言って真逆も真逆、「綺麗に正反対」だ。典型的なA型とB型の関係の美しい見本の様だよ、いや、マジで繋がってんのが不思議なくらい「超絶に正反対」。

でも俺と君とはもう何故か13年来の腐れ縁で、奇跡的にお互い胸を張って「親友」と呼べる揺るぎない信頼を築き上げられちゃってる。他の人に君が絶対に明かしていない裏の君…俺は面白いから「第2タカハシ」って呼んでる…それを俺は色々知ってる。君が俺の明かしてくれた事は絶対誰にも言わないぜ！だから俺が君に明かした事絶っっっ対誰にも言うなよな！ギブアンドテイクなんだぞ、基本A型は！

…脱線したけど、君も俺以上に俺の事を良く見ていて、俺が気付か

ない事を実に的確に指摘してくれるから、ぶっちゃけ、めっちゃ気持ち良いんだよね。
君に的確に斬られるのってすんごい快感なんだよね。俺が仕掛けて君が迎撃して、スパーッン！って一刀両断されるのがもう、中毒性がある快感なんだよね。やめらんないよマジで。
そんでもって君は俺が多少暴言吐いたって適当に流してくれっから実に小気味良いし、基本ロボットの様に何事もスムーズに進めたいA型の、不慮のトラブルでショートした思考を抜群のトラブル処理でフォローしてくれるからめちゃくちゃ心強いんだわ。
言い方すんごい悪いけど、君は俺の「頼れる保険王」なんだよね、超失礼だけと。A型って保険大好きだかんね、安心がバックに着いてないと本領発揮出来ないんだよね。
安心大好きなA型は何事にも「不慮のトラブル」を起こさない様に持ちうる全精力を注ぐから、いざ「不慮のトラブル」が起こるとマジで頭が真っ白になんだよね。予測の範囲内なら逆に「来たか！」ってやる気満々になんだけど、「不慮」になっちゃうとびっくりするぐらいズタボロなんだよね。
ズタボロがズタボロを呼んでどうにもなんなくなんだよね。

だからそうならない様に何事にも神経質なのさ。几帳面に真面目に行動するのは、たまにびっくりするぐらいの凡ミスで奈落の底に簡単に落ちるから、自分を守るための保険なのさ！
「神経質・几帳面・真面目」は三大特約付き終身保険なのさ！我ながら自らの血を面倒に思うぜ！
そういや君は昔面白い事言ったな…。

「サクラバはさ、新型のモビルスーツに対してさ、なんだあいつは？！データに無い敵だぞ？！本部！データをっ！データをーっ！！…っつって戦死する連邦のパイロットだよね。」
あの一言には腹が捩れるぐらい笑ったよ。実に的確！俺の事を良く

見ていて下さってます！痛い所をピンポイントで、実にスカッと一刀両断された快感と、ちゃんと俺を見ていてくれてんだなって尊敬と感謝を感じたよ。
そう！A型とB型…つうか何事にも「絶妙な距離感」、「互いへの理解」に加えて「尊敬と感謝」が携わってないと絆なんて生まれないよな。俺が君にとってびっくりするぐらい馬鹿なミスをしたのを君がフォローし、君が俺にとって考えられない馬鹿なミスをしたのを俺がフォローする。

それを極自然にやれてるのは13年ってハンパじゃない付き合いから生まれた「信頼」なんだよな。最初は結構喧嘩多かったもんな。喧嘩になっとお互い馬鹿みたいにつまらない意地張るから、長引いてお互い疲れんだよな。
それが分かってから自然に喧嘩無くなったよな。そういや君の愛して愛して愛しちゃってる彼女さんもA型だったよなぁ…。

君は案外A型と上手くやれるB型なのかもしんないな。実際、俺は君と喋ってる時間がこの世で一番楽しいよ。例えが良くわからんけど、キャバクラとかCLUBとか車のイベントとかより135、6倍は楽しいや。君のユーモアセンスにはいつも腹が捩れる程笑かされるしさ、言う事成す事俺には刺激的でセンセーショナル。
あ、「気楽なユーモア」もA型とB型の間には必要なんだな。
ヘックシュッンッ！！

君から送られて来た暗号に、何時からだろう、とめどない感慨に耽っていたら、気付けば水戸黄門目覚まし時計の針が午前2時を回っていた。
やばい。やばい。やばい。しくじった。完璧しくじった。寝ないとやばい。肉体労働は寝ないとやばいんだ。実証済みなんだ、ちゃんとデータがあっての「やばい」なんだ。

て事で俺、元・『サクラバアツシ』で現・『Aさん・S29－10
15』…、やっぱ腹立つわ、…ったくふざけた改名だよな…、住基
ネットの次元じゃねぇよ、俺らはいよいよロボットだな。基本ロボ
ットみたいにスムーズに事を進めたいA型でも、自分の事を良く見
ていて欲しいって願望は人一倍あんだよ。
A型の男は「つまんない」「刺激が無い」ってがっかりイメージは
さ、安心保険「几帳面・神経質・真面目」の三大疾病ウルトラガー
ド特約付けてるからそんな不愉快なイメージで捉えられるんだよな。
「地味」とか、「細かい」とか。目立つの苦手とか。あ、これは俺
のただの性格か。アハハ。

でも片やA型本人には個性を認めて欲しい願望はダントツにあるん
だぜ。だから自分をまるで本当にロボットの様に扱っちゃう様なシ
ステムには、細かい所で反抗したくなっちゃってしょうがない。自
分で自分をロボットって言うのは良い。他人に言われると非常に不
愉快だ。
だから俺は君らと一緒に『FULL－BLOOD』の構成員として
陰で権力に悪戯しようとしてるわけで。
裏で地道にコソコソ悪戯を勧めてゆくのも非常に好きなわけで。
何かに突っ走り始めたA型は誰にも止めらんないんだぜ？よっぽど
の事が無い限り、地道に着実に執拗に、鋼鉄の意思で望むエンディ
ングを目指すぜ！

…まずい。まずい。また脱線したっ。バーチャルアイドルのアケミ
だかヒロミだか忘れたが、脳内で「睡眠時間あと3時間でーす！」
とかニコニコしながら嫌味言い始めたっ。

そうだよ！俺は今の名前を言った後に「俺にはO型の血も入ってい
る」って言うつもりだったんだよ！すっかり脱線した、そう、O型

の血が入ってるので彼からの暗号は思い切り正々堂々と「第三者にパス」して寝るから！
チョッパヤで「あのバカ」に打信をそのまま転載して、華麗なるパス・テクニックを見せ付けながら俺の母星に還りますわ！
案外パスは得意よ、A型だってね！

ヘックシュッンッ！！

さーて…「あのバカ」はバカみたいにグースカ寝てるだろーから事前に携帯で起きるまで着信を掛け続けてやるかな…。
暗号を転載してる間ずっと掛け続けてやろ。起きるまで。
ああ…、面白いなぁ…。
「O型」をオモチャにするのは面白いなぁ。あのバカどんな声で電話出るかな…。出なかったら後ですげー嫌がらせのメール送ってやんべ。ぷぷぷ…。

フワァックシュッーンッ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3615z/

血国の星のマクロファージ

2011年12月13日03時45分発行